



第 21 号

平成30年 3 月 12 日発行

会 員 募 集 中

年会費 3,000 円

10月以降入会 1,500 円

講演会シリーズ「岡山の底力」始まる 第 1 回は「スピリット オブ オカヤマ」

岡山歴史研究会では「岡山の底力」と題して連続して講演会を開催していきます。第 1 回目として「スピリット オブ オカヤマ」と題する講演を以下の要領で開催します。奮ってご参加下さい。

演 題：「スピリット オブ オカヤマ」

講 師：臼井洋輔 氏（備前市立備前焼ミュージアム館長、岡山歴史研究会顧問）

日 時：平成 30 年 3 月 31 日（土） 開場 13 時、講演 13 時 30 分～15 時

場 所：岡山国際交流センター 8 階（岡山市北区奉還町 2 丁目 2-1 TEL 086-256-2905）

参加料：一般 1,000 円、会員 500 円、但し学生は無料

講師の臼井洋輔氏は昭和 17 年玉野市生まれ。岡山大学法文学部博士課程修了（文学博士）。岡山県教育庁課長代理、岡山県立博物館副館長等を経て、平成 15 年から 24 年まで吉備国際大学教授。現在は備前市立備前焼ミュージアム館長。著書に「岡山の文化財」「岡山の宝箱」等多数。平成 26 年度岡山県文化賞を受賞。自分たちの依って立つ岡山のことを『岡山の 5 つ星』として取り上げられ、岡山の本質を語られます。

続いて、若手の文化・芸術関係者との座談会を予定しています。



臼井 洋輔 氏

若手文化・芸術関係者との 座談会

（午後 3 時 15 分～4 時 15 分）

「日本人が置き忘れてきた大切なもの…」

若手の文化・芸術関係者三氏と基調講演者・臼井洋輔備前焼ミュージアム館長とで、岡山の歴史、文化の奥深さ、素晴らしさや、現代の日本人が忘れていた大切なもの等について議論します。



川 埜 龍三 氏

現代美術家



川 島 ゆか 氏

フリーライター、前瀬戸
内市教育委員



榮 久美子 氏

岡山県立大学・地域共
同研究機構特任講師

歴・研・展・望

会長 大田 弘之

「見えるモノより、見えないモノにこそ力を注ぐのが岡山の文化の本質である—それは、何故でしょうか」

岡山の文化財を長年にわたり見続けてこれ、県立博物館副館長、吉備国際大学教授等を歴任さ

れ現在、備前焼ミュージアム館長の臼井洋輔先生は、こう問いかけておられます。

浅学菲才の私は、恥ずかしながら的確な答えを持ち合わせていない。岡山は歴史面でも、文化面でも、素晴らしいものがたくさんある、とつい

簡単に口では言ってしまうが、岡山の文化の本質はどういうところにあるか—という事を掘り下げて考えて来なかったことを今、思い知らされている。

3 月 31 日、岡山国際交流センターで開催する講演会「スピリット オブ オカヤマ」は、その答えを見つけられる場になるだろうと期待している。臼井先生は、岡山の人が拠って立っているこの吉備の国の本質を探り続ける作業を積み重ねてきた末に、「岡山文化の真髄」を、五点に纏めて「岡

山の五つ星」として提言しておられる。その本質の一つには、こんなものもある。「世の中が混沌となる時代の境目になると、たいていの場合、先頭に立って新しい時代を引っ張って来たのが岡山である」と。岡山は古くからいろんな人材を輩出してきたが、岡山の歴史を見ていく上で、違った視点、新たな視点も勉強できそうだ。岡山の底力はどこにあるのか—多くの会員の皆さんと一緒に、素晴らしい勉強の場に出来ればと期待している。

平成 30 年度定期総会の案内

1. 日 時 平成 30 年 4 月 28 日（土） 入場受付 13 時～（終了予定 16 時 00 分）
2. 場 所 岡山県立図書館 2 階（岡山市北区丸の内 2-6-30 TEL 086-224-1286）
3. 日 程
 - 第 1 部 定期総会（議案審議）13 時 30 分～14 時 10 分
 - 第 2 部 記念講演 14 時 30 分～16 時 00 分

演 題 「維新前後それぞれの願いを探る」

講 師 定兼 学 氏（岡山県立記録資料館長）

是非、ご参加下さい。

報告『地名学では邪馬台国は岡山です』—その2

邪馬台国、もう1つの条件、黥面について考察

会員 丸谷 憲二

はじめに

前号、会報 20 号に『地名学では邪馬台国は岡山です』その 1 を報告しました。邪馬台国の最低条件は、地名の『太白』と『黥面（入墨面）』と考えます。前号において、『太白』の地名が岡山県にしかないこと、そして、中国の正史に記録されている太白説を紹介しました。江戸時代、太白論争回避策として『太白』のルビに「オク」と付けられたこと、太宰府天満宮蔵の国宝の古文書『翰苑（かんえん）』の太白の記録が正しいことなどを述べました。

邪馬台国のもう 1 つの条件、『黥面』について以下に紹介します。誤解を避けるために、タイトルに地名学を入れて『地名学では邪馬台国は岡山です』その 2 とします。

私は昭和 43 年に西大寺に来ました。それ以来、毎年会陽、裸祭りを見てきました。入墨をした人が多いの

に気づきました。昭和 49 年以降、入墨をした人は参加を禁じられました。しかし、私にとっては入墨を調査、研究する端緒になりました。

入墨には 2 種類あります。顔に書く入墨を黥面と呼び、体に書く入墨を分身といいます。

18 設楽博巳氏による『黥面』の研究の紹介

多くの研究者が、発掘された入墨のある黥面や埴輪について研究論文を発表しています。設楽博巳氏（東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室教授）の論文を紹介します。

- ① 「線刻人面土器とその周辺」『国立歴史民俗博物館研究報告 第 25 集』1990 年「男子は大小となく皆黥面文身す－倭人のいでたち」設楽博巳『三国志がみた倭人たち－魏志倭人伝の考古学』2001 山川出版社
- ② 「イレズミからみえてくる邪馬台国」設楽博巳『海でつながる倭と中国－邪馬台国の周辺世界』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編 2013 年新泉社

18.1 縄文・弥生・古墳時代の入墨の違い

以下に設楽博巳氏による時代別の黥面を図示します。この中で、私は古墳・弥生・古墳時代の入墨の相異、変化に注目しました。これは変化ではなく渡来元の違いによるものと考えます。邪馬台国は弥生時代です。



時代ごとの黥面：設楽博巳著「イレズミからみえてくる邪馬台国」より

18.2 倭人の文身

鳥居龍蔵氏は、倭人の文身は装飾ではなく宗教的な神秘的なもので、雲南省から揚子江畔に分布したものが日本に伝播したもの、その源流はインドシナ族で、苗族などの文化・習俗の伝播したものとしています。そして『有史以前の日本』『苗族調査報告』を著し、彼は、未開拓の大陸の考古学や人類学・民族学の方面に、自ら足を踏み入れ、自らその閉ざされていた扉を開きました。

18.3 「黥面」について中国史書各倭人伝の対照

中国の史書に書かれた倭人の黥面についての表現は以下の通りです。

- | | |
|--------|-----------------------|
| 『魏略』 | 其の俗は、男子は皆点而（黥面）文〔身〕す。 |
| 『御覧魏志』 | 其の俗は、男子は大小と無く、皆黥面文身す。 |

『魏志』	男子は大小と無く、皆黥面文身す。
『後漢書』	男子は皆黥面文身し、
『梁書』	俗は皆文身す。
『晉書』	男子は大小と無く、悉く黥面文身す。
『北史』	俗は皆文身す。

記録がないのは、『宋書』『南齊書』『隋書』『南史』です。これらの著者は、黥面は常識であり、記録は不要と考えたと解釈します。

18.4 邪馬台国の入墨

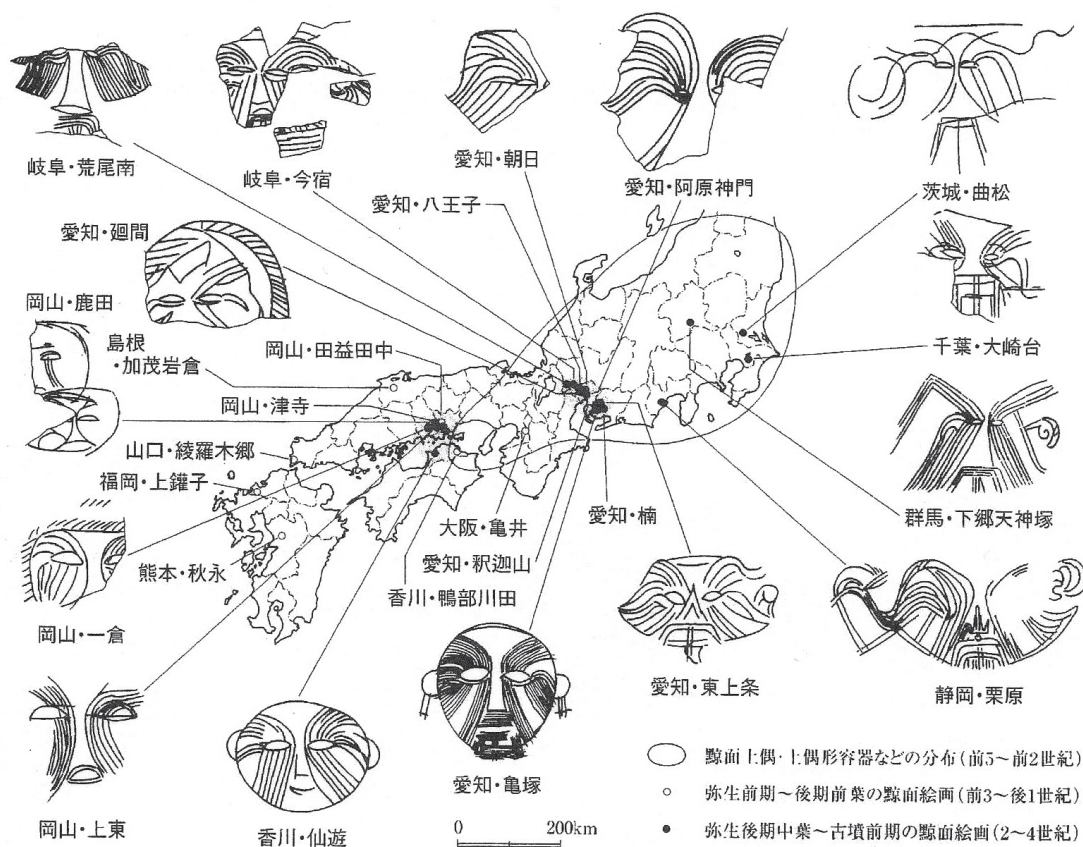
日本における黥面の分布は下図の通りです。分布の特徴から考察すると次のことが考えられます。

岡山県の県南部に集中しています。それと、香川県善通寺市、愛知県と岐阜県の境目、愛知県安城市付近の濃尾平野にも集中しています。

その間にある近畿地方からは一つも出ていません。

線刻人面絵画がなかった近畿地方にも、5～6世紀になり顔に線刻のある埴輪が登場します。しかし、弥生時代のものには入墨はありません。

『古事記』に2ヶ所、『日本書紀』に6ヶ所、合わせて8ヶ所の黥面・文身の記述が有ります。5～6世紀の史実を反映していると考えられます。8世紀には公的には、入墨の習俗は無くなっています。



黥面の出土分布図：設楽博已著「イレズミからみえてくる邪馬台国」より

18.5 出土した黥面の年代分析

黥面が出土した場所と年代について以下のように考えます。

① 愛知県と茨城県の黥面

愛知県安城市の亀塚遺跡出土（3 世紀）と茨城県下館市の女方遺跡出土

② 2～3 世紀の香川県の黥面

善通寺市の仙遊遺跡出土 石棺の蓋

③ 2～3 世紀の岡山県南部の黥面

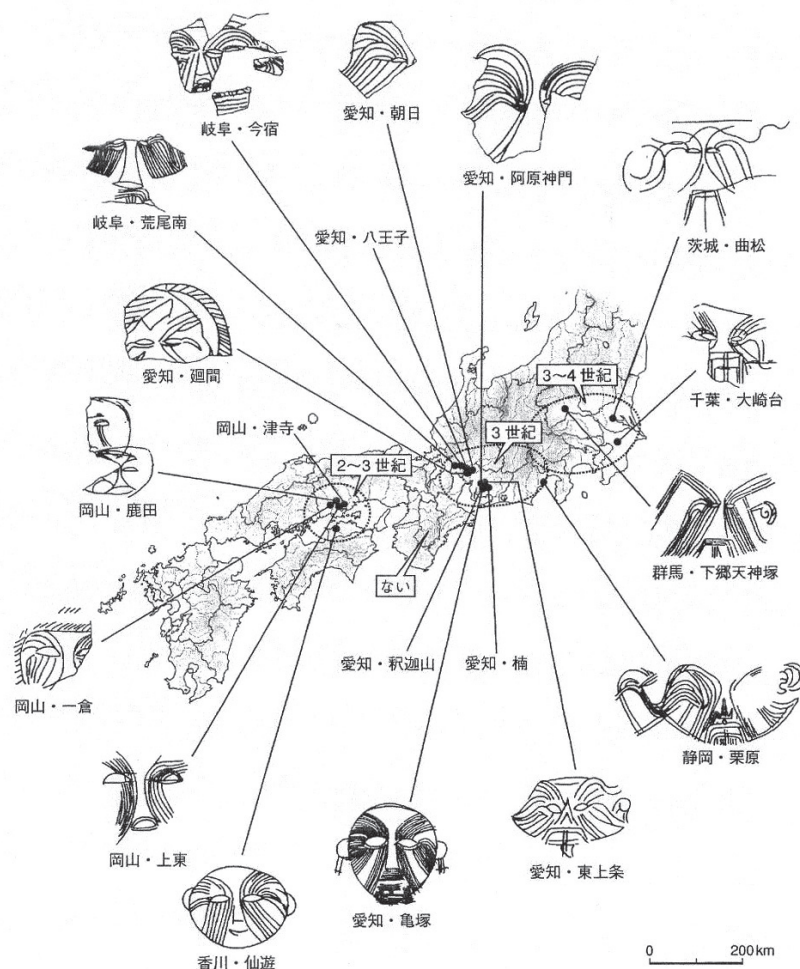
岡山市埋蔵文化財センターは、「全国的に多く出土する遺物ではないが、岡山県南部で比較的多く発見」と報告しています。

岡山市の鹿田遺跡の人面土器は弥生後期です。高杯は縦 5cm です。総社市の一倉遺跡の人面土器は弥生後期です。小形鉢は縦です。

岡山市の津寺遺跡黥面土偶の人面土器は弥生時代後期です。

倉敷市の上東遺跡は紀元 1～2 世紀頃です。

田益田中遺跡の黥面土器碎片と復元図は弥生前期です [香川県さぬき市志度町 鴨部川田遺跡も同一]。



出土した黥面とその年代：設楽博巳著「イレズミからみえてくる邪馬台国」より

18.6 楯築弥生墳丘墓の弧帯紋石人面

倉敷市の楯築弥生墳丘墓から出土した弧帯紋石人面は弥生後期のもので人面の縦は 18cm あります。

御神体の弧帯紋石の顔は、人面の内、目を恐ろしく強調し、頬に入墨状の線を描く邪視文の人面です。近藤義郎説（岡山大学教授）と中央部分をコンピューター解析した池田仁三説では、ライオンの顔説となっています。しかし、これは黥面の誤読であると考えます。

楯築遺跡は 2 世紀後半の日本全体の中で最大規模の弥生墳丘墓です。

18.7 大伯と入墨による邪馬台国の位置の決定

① 邪馬台国の所在地は、大伯の地名と入墨の伝承により決定されと考えます。

② 設楽博巳氏の古代入墨研究により分布の特徴が確認されました。

2～3 世紀の線刻人面絵画の出土は吉備国のみです。

③ 3 世紀に愛知・岐阜・静岡に移動し、3～4 世紀に群馬・千葉・茨城へ移動したと考えられます。

④ 兵庫県では発見されていません。つまり兵庫県は、邪馬台国には含まれてないと考えられます。そのことを平成 26 年 5 月に兵庫県立考古博物館で確認しました。



楯築弥生墳丘墓の御神体の人面

19 出土した黥面による邪馬台国の範囲

邪馬台国は、昔の海岸線にそった遺跡で弥生時代の黥面が出土している範囲となります。

従って備前市、瀬戸内市、岡山市、倉敷市、玉野市、総社市、小田郡矢掛町、それにさぬき市～善通寺市が入ると考えられます。

20 まとめ

- ① 『魏志倭人伝』には、邪馬台国の場所は書かれていません。

邪馬台国を太伯と記録しているのは、『日本書紀纂疏（さんそ）』・『魏志倭国伝』・『翰苑（かんえん）』です。

- ② 太伯（タイハク）地名は呉音で伝来し、大化改新（645 年）以後は大伯（タイハク）と漢音で表記されました。

古代の地名は、呉音と漢音の確認が必要です。

- ③ 江戸時代の水戸学によるタイハク論争を防止するために、漢音大伯に、オク（邑久）とルビを付け大伯地名を消しました。仕掛人は水戸学の水戸光圀と池田光政と推定されます。

- ④ 歴史学的には、大来（オク）木簡発見時に、疑問を持つべきだったのです。二つの地名を一つの地名と思い込みました。

- ⑤ 明治以降に出版された、『日本書紀』『万葉集』の関連図書には全てルビを付けてあり、それにより誤読が生じています。

- ⑥ 邪馬台（ヤマタイ）国は、「ヤマト」の誤読です。『「大和」は「ダイワ」であり、「やまと」とは読めない漢字です。読まされているのです。（読んでもらいたいのだ。）』というのが矢吹寿年氏の説です。

- ⑦ 黥面の分布と太伯の地名から、邪馬台国（ヤマト）を大和（ダイワ）に求める畿内説、九州説、山陰説、その他の説も全て間違いです。

- ⑧ 黥面の発見と太伯の地名は、邪馬台国の最低条件です。

- ⑨ 倭（ヤマト）国は、吉備国・岡山県にありました。

- ⑩ 卑弥呼の墓は吉備国内を探せば見つかるはずです。鯉喰神社弥生墳丘墓が卑弥呼の墓であるというのが若井正一・広嶋照治説です。

- ⑪ 太伯は、卑弥呼と台与の生誕地と考えます。

- ⑫ 卑弥呼の邪馬台国と大和朝廷は、伊勢神宮の斎宮で完全に繋がりました。



邪馬台国の範囲

終りに

私のこの説は 4 部で成立しており、その 3 が「邪馬台国と大和朝廷」その 4 が「伊勢神宮と吉備国」です。邪馬台国と大和朝廷が直結してはじめて邪馬台国説です。そのことをいずれまた発表したい。

ところで、現在の岡山市東区の神崎にある太伯・長沼岩神で巨大な磐座が発見されました。

小字名が大岩の下にあり、高さ 8m の巨岩磐座と古代祭祀の祭壇を発見しました。周辺を調査すれば、古代祭器が発見されるはずです。



新しく発見された磐座

シーボルトに関わる三人の美女の生涯 母タキ・娘イネ・孫タカコ

神戸市 能勢 初枝

◆はじめに

高槻（大阪府）の自宅を処分して、マンションに住もうと、夫が突然言い出して、岡山市の旭川沿いのマンションに移ったのは、2009 年（平成 21 年）初めのこと。私は岡山市生れで高校まで岡山で過ごしたが、岡山を離れて 60 年ともなると、町もかなり変貌している。

ある日、デパート天満屋がある岡山市のメイン商店街のすぐ東の道を自転車で走っていると、とある建物に「シーボルトの娘おいねが、産科の修業をした「石井宗謙の医院跡」という、30 センチばかりのプレートが目についた。実はこの道は旧西国街道だということもその頃知ったのだが、昔は何の変哲もない道だった。いまおしゃれなブティックなども出来はじめ、街灯に旗などもとりつけられて、「オランダ通り」として、華やかな町並みに変わりつゝあった。

いねが、岡山で産科の勉強をしたことがあるということは、薄々知ってはいたが「ヘー、ここなのか！」と、ちょっとうれしくなった。その日は、カメラもメモも用意がなかったので、後日改めて来るつもりで、そのまま自転車を走らせた。

ところが、その何日か後、カメラを持って行ってみるとプレートがない。建物の入口を掃除をしている事務員らしき人に聞いてみたが、何も知らない。だいたい、そんなプレートがあったことさえ知らないのだ。他に聞く人もいないので、そのまま帰ったが、ひどく寂然としない気持だった。

その後、何人かに聞いてみたが、知っている人に会わなかった。「オランダ通り」と呼ぶのは、いねがいたからなのだろうと思うが、古くから岡山に住んでいる人でも、ここがオランダ通りと呼ばれていることさえ、知らない人も多かった。

ただ、これがきっかけでおいねさんのことを調べてみようと思った。

岡山で手作り新聞『吉備路通信』を発行していて、それに『おいねさん物語』として何回か連載した。その後、岡山から、娘たちの住む神戸へ越したのは、今から 5 年ほど前だが、この度「お稲さん物語」をまとめる気になって、加筆修正したのがこの稿である。

先日、久しぶりに岡山へ行き、時間をつくって、オランダ通りへ行ってみた。

ナント！以前にはなかった「下之町商店街観光案内所」が出来ていて、賑やかな色彩の壁に『おいねさんの事象』を説明した大きな説明板が懸かっていた。

また、その前の路上には、「オランダ東通り」という銘板が設置されていた。本格的に、おいねさんとオランダ通りを宣伝することにしたらしい。案内事務所は鍵が掛かっていたが、通りも、以前より賑やかになっているようだった。



「オランダおいね医学修業の地」説明板。ここでいねが産科の修業をした石井宗謙の病院跡であると書かれている。



『下之町商店街の観光案内所』の建物。まるで幼稚園のような可愛らしい色と絵柄で彩られた中に、お稲さんの説明板が掛っている。



オランダ通りの敷石は煉瓦



「オランダ東通り」の銘板



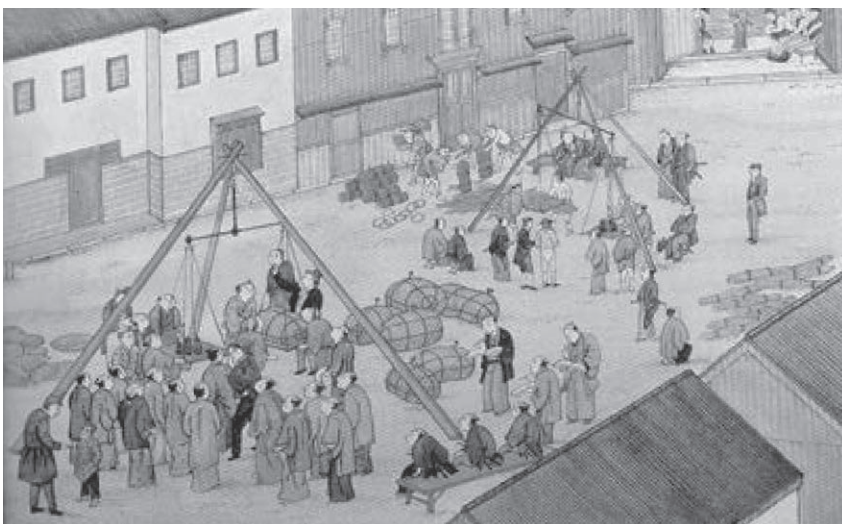
長崎湾の景色。

文政 3 年（1820）石坂融思筆。
中央の島が出島。



出島阿蘭蛇屋舗景 長崎版画

版元豊島屋文治右衛門が安政 9 年に作った版画。
建物の配置状況を忠実に写している。



これらの写真は、「國史大辞典」
（吉川弘文館）から引用。

出島における商品計量の風景

入札で商品を落札した商人は、その翌日に出島に出頭し、出島役人・オランダ人立ち会いのもとで計量された荷物が渡された。その荷物には、出島より持ち出しの許可証が付けられ、出島の表門または水門から持ち出した。

タキ 母の時代「わたしと娘はいつも涙を流していました」

◆ シーボルトが熱愛した遊女

キリスト教禁制政策をとった徳川幕府は、キリスト教の影が薄いオランダと中国との貿易を継続することとして、長崎に出島を築いた。従って出島へはオランダ人と清国人以外の者は入ることが許されなかったばかりか、逆に彼等はその狭い囲いの外に出ることを禁止されていた。

その中へ入ることを許されていた日本人は、一部役人と遊女たちだけだったので、男たちのただ一つの慰めは遊女との情交だった。

出島へ出入りする丸山の遊女は、他の日本人向けや唐人向けとは区別されて、特別に収入がよかった。

シーボルトの娘^{いね}稲の母親タキは、長崎の銅座跡で、代々こんにやく商（材木商説もある）を営む商人^{さひょうえ}佐兵衛の娘として生れた。彼女には、ツネ、ヨネ、マサという 3 人の姉と、善四郎という弟、さらにサダ、フミという妹^{きょうだい}までいる 7 人姉弟のまん中だった。

佐兵衛は、多くの奉公人を使い、手広く商いをしていたが、使用人の使い込みから商売が傾き始め、多額の借金がかさんで、ついに店も人手にわたることになった。その挙句裏長屋に住む境遇になったのは、タキが少女になる頃だった。

多くの家族が生きて行くために、佐兵衛はやむなく長女のツネを遊女に出した。

長女ツネは美しい娘ではあったが、妹のタキは、さらに美しかった。丸山の遊女屋から、タキもぜひ遊女奉公に出すようにと佐兵衛は強くすすめられた。

ツネの収入で一家はなんとか飢えを凌いでいたが、決して豊かではなかった。ツネは、妹タキの遊女奉公に反対したが、佐兵衛はタキのことも認めざるをえなかった。タキ自身は死ぬほど嫌だとは思ったが、一家のために決心した。

其^{そのおうぎ}扇という源氏名を与えられて、出島の橋を渡ったのはタキ 15 歳の春だった。

彼女が出島へ出入りする遊女になって 2 年近くたった文政 6 年（1823）、出島駐在の商館員の交替があり、医官のフォン・シーボルトが日本へやって来た。彼は、ドイツ人だが、オランダ政府の密命を帯びてオランダ人として来た。

出島の商館員たちは、それぞれなじみの遊女を持っていた。

其扇が、誰のものでもないことを知ると、27 歳のシーボルトは、美しいこの遊女に執心し、激しく求愛した。其扇には、外国人は獣^{けもの}のように思われたが、ここはしっかり稼いで、いずれ日本人と所帯を持つつもりもあった。

「ソノオウギ」と発音するのは難しく、シーボルトは「ソノギ」と呼んで、一時も彼女を離さなかった。

◆ 日本中から俊英が集った鳴滝塾

当時、漢方医学の知識しかない日本で、ヨーロッパのすすんだ医学を身につけていた医官シーボルトは、出島内部ばかりではなく、特別な日本人の治療も頼まれるようになり、彼だけは治療のために町の中へ出かけることが認められた。

最初は屋内での治療は許されず、戸外で治療をした。しかし、それではあんまりだということになって、町の中に診療所をもうけることが許された。

彼は、川沿いで後ろに小山がひかえている「鳴滝^{なる たき}」の地をえらび、そこに診療所を建てた。

余談だが、今から十数年前、長崎を訪れたとき、鳴滝の地をたずねた。

その先に「シーボルト記念館」もあるが、タクシーの運転手でもその場所を知らなかったもので、大通りから、桜が舞い散る川沿いの道を歩いた。

現在、庭園の中に建物は無いが、庭石と庭木と建物の礎石が残っていて、当時の雰囲気を与えてくれた。

シーボルトは治療だけでなく、彼に憧れて、オランダ語や医学を学びたいと、各地からやって来た日本の若者に、ここで医学や言語の知識を与える塾を開いた。

シーボルト塾の俊英として、^{みなとながやす}湊長安、^{みまじゅんぞう}美馬順三、^{ひらいかいぞう}平井海蔵、^{こうらさい}高良斎、^{にのみやけいさく}二宮敬作、^{いしいそうけん}石井宗謙、^{いとうげんぼく}伊東玄朴、^{たかのちようえい}高野長英、^{いとうけいすけ}伊藤圭介等の名が伝わっている。

この庭園でシーボルトは、オランダ政府から命じられていた日本の各種の植物の調査、蒐集のための花壇も作った。彼は、植物に限らず、日本の珍しい文物を、その都度の船便に乗せて故国へ送っていた。ごく最近も、オランダやドイツから逆輸入の形で、シーボルトが蒐集した草花などが、日本へ送られたというニュースを聞くことがある。

彼の熱心な蒐集への意欲が、世に「シーボルト事件」と言われている大事件を引き起こすことになるのは、文政 11 年のことである。

◆ 江戸城参府

日蘭貿易のために、長崎にやって来たオランダ人の任期は 4、5 年で、館長（カビタン）は 2 年毎の交替になっていた。また、館長は 4 年に一度、将軍のご機嫌伺いに江戸城に参上する決まりがあった。

文政 9 年が江戸参府の年だった。シーボルトは、主席随員として江戸に赴いた。

これまでの参府は館長付き医師、書記、通詞、役人、人夫など 50 人程度の集団だったが、このときはシーボルトの希望で、鳴滝塾の塾生数名やお抱え絵師等も加わって、107 人という大所帯になった。絵師には日本の風俗など描かせる目的があった。大勢のため、いつもの定宿に泊まりきれず、大騒ぎになったという。

彼は「日本に於ける万有的調査の使命を帯びた外科少佐ドクトル・フォン・シーボルト」と報告書に署名するほど、動植物の蒐集はもちろん、珍しい物品、風俗習慣すべてを集めたが、とりわけ欲しかったのは日本地図だった。

シーボルトは江戸滞在中に多くの人物に会った。なかでも幕府天文方筆頭の高橋景保（^{かいげやす}作左衛門）には、何度也会って自分が持って来た『世界一周』という書物をちらつかせて、地図をもらいたいと迫った。

高橋景保は樺太研究書『北夷考証』を著した当時の最高の学者であり、同じく天文学者であった父^{よしとき}至時を継いで、伊能忠敬^{いのうただたか}の全国測量事業の監督^{はつと}を幕府から命ぜられ日本地図を完成させていた。

それだけに、地図を渡すことは法度であると、何度もシーボルトに断ったが、鎖国の日本にあって、学者として世界を知りたいという誘惑に勝てず、ついに地図とシーボルトの『世界一周』という書物との交換に応じた。

◆ イネ誕生

シーボルトは江戸から帰って、集めた資料の整理を続けながらも、其扇に対する執着はいよいよ激しく、うわごとのように「ホマエ（お前）ウツクシカ」「ヨカヨカ」と言って、タキを抱き続けた。シーボルトが江戸から帰った直後の文政 9 年秋、タキは懐妊した。

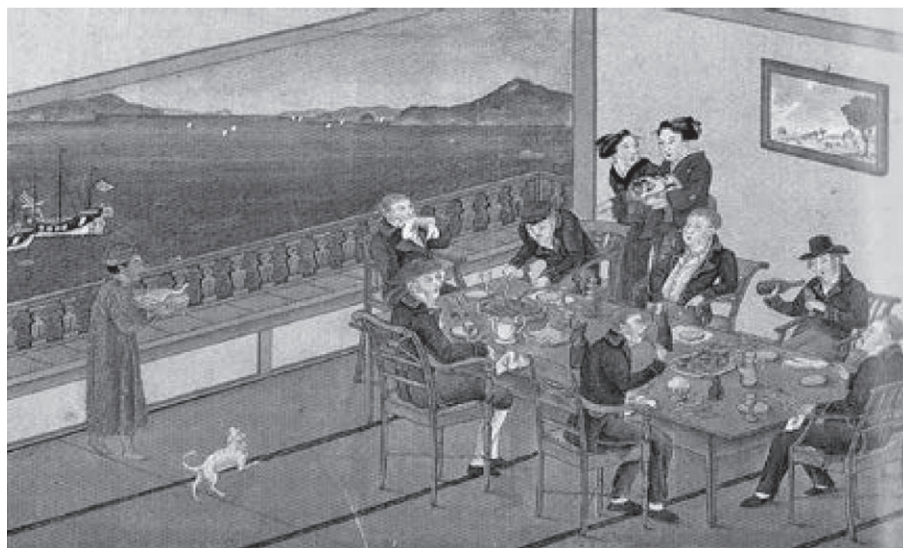
タキは、いぜんから「居ツヅケ」といって、ほとんど出島の中で暮らしていたが、出産までは生家に帰った。

混血の子は、育ちにくいとか、死産が多いとか言われていた、医学的にそうであったというより、出産を望まない風潮から、間引きや堕胎が多々あったと思われる。

しかし、タキの場合は、シーボルトも心から喜んで彼女をいたわり、実家でも、名医として人々の尊敬を集めていたシーボルトの子として、その懐妊を祝福した。

タキも妊娠してからは、シーボルトに対する思いに変化が生れ、彼のことを「ダンナサン」と呼び、シーボルトも「オタキサン」と呼ぶようになった。

タキが紫陽花に似ているからと、シーボルトはこの花を「オタキサン」と名付けたが、それはいつしか「オ



宴会風景

蘭館内でのオランダ人の食事風景は、日本人には珍しいものであった。食卓には牛の頭の丸焼きや、ガラス製のコップが並んでいる。床は畳敷だが、窓の手摺りは洋風に描かれている。壁の絵は遊女が描かれている。



鳴滝塾全景

シーボルト二度目の来日のおり、撮影したもの

タクサ」になり、紫陽花の学名になった。

文政 10 年 5 月 5 日、端午の節句の夜、タキは元気な女の子を生んだ。名前はイネと名付けられた。一般に稲、伊柰と書くことが多いので、ここでも稲と書くことにする。

色白で、大きな青い目、鼻筋の通った稲は、赤ちゃんながら美人だった。髪の毛は母親似なのか、完全な金髪ではなかった。

シーボルトは、稲が自分の娘であることを役所に届けた。

5 月末になると、しびれを切らしたシーボルトの元からタキと稲に、出島へ早く帰って来るようにという催促があった。出島には一般人は入れなかったが、遊女が生んだ子は、7 歳になるまで自由に出入りできた。

その頃シーボルトには、オランダ本国から、1 年後に帰国するようにという書簡が届いていた。

彼は、日本で集めた資料が膨大だったので、助手を頼んで整理を始めた。

タキは、出島の暮らしに飽きると、稲を連れて実家へ遊びに行った。実家の両親は、異国人の血を引く孫の将来を心配しないわけではなかったが、可愛さが勝って、稲をみると、だれもが抱いてあやした。とくに父左兵衛は可愛がった。

稲はそんな大人たちの思いの中で元気に育っていた。シーボルトも、この子が可愛くてたまらない。

翌年の正月を迎えて、数え年で二つになった稲は大きなシーボルトに抱かれるのが好きで、父親の腕の中でにこにこ笑う。間もなく別れるかと思うと、シーボルトは出発のことを、タキにさえなかなか話せずにいた。

しかし、文政 6 年（1823）に来日して 4 年以上過ぎたシーボルトは、どうしても帰国しなければならない時期だった。

◆ シーボルト事件

文政 10 年 6 月 26 日、オランダ船コルネリウス・ハウトマン号が長崎湾に入港した。町は、オランダ船の入港で活気にあふれた。この船に乗せるために、シーボルトの荷造りは忙しくなった。

その様子に疑念をいだいたタキは助手に問いただして、シーボルトの帰国を知った。出航は来年の 9 月 20 日の予定だという。まだ二つ（数え年）の稲をかかえて、これからどうすればいいのかと、タキは暗澹たる気持になった。

シーボルト自身も、可愛いいさを迎えた稲と愛するタキを残して行くことを思うと、胸がはりさけるようだった。「カナシカ」と何度も涙を浮かべてタキと稲を抱いた。

そんな中でも、資料の梱包はすすみ、秋の終わり頃には、ほとんど荷物は船に積み込まれた。

文政 11 年の年が明けて、種々の手続きが終わり、間もなく出航という 8 月 9 日、日没頃から小雨がぱらつき始め、夜になって風、深夜には暴風雨になった。その夜のことを『古老実験』という書物に「空前絶後」と書かれている大型の台風が長崎の町を襲った。

港のコルネリウス・ハウトマン号も容赦なく高波に襲われて、とも綱が切れ流されて、稲佐^{いなさ}の海岸で座礁、荷崩れが起こった。役人は、崩れた荷物の整理作業をしながら、被害調査を行ううち、荷物の中に海外への持ち出しが禁じられている禁制品をいくつも見つけた。とくに、日本地図と徳川の葵の御紋が付いた帷子^{かたびら}は、とうてい許されない禁制品であった。

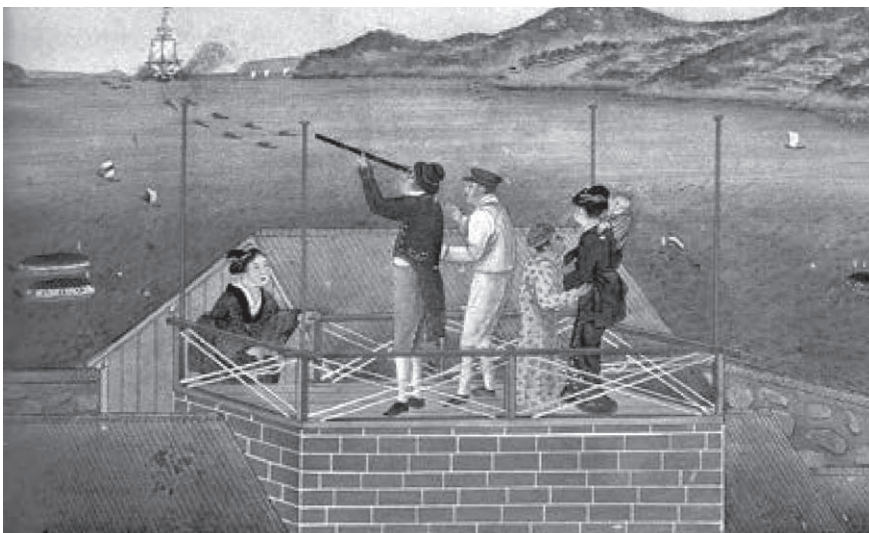
シーボルトは取り調べの上、一時オランダ商館長預けとなった。

しかし、地図を渡した高橋作左衛門（景保）は、獄門死罪を申し渡された。清廉な学者として知られていた高橋作左衛門は、4 ヶ月に渡る激しい取り調べですっかり衰弱し、43 才ながら、老人のようになって獄中で命をおとした。その遺体は塩漬けにされたうえ、首は街中に曝された。

景保ばかりか、その 2 人の子どもも遠流になり、また江戸参府に同行した通詞や塾生までも、処払いなどの罰を受けた。

シーボルトへの取り調べは繰り返し続いたが、彼は要領を得ない曖昧な答弁に終始した。しまいには幕府方が、手をやきサジを投げたかたちで、やむなく国外追放とした。

翌年 1 月 10 日出航のコルネリウス・ハウトマン号で、彼はオランダに送り帰された。タキは、寒風の中、稲をだいて、いつまでもいつまでも、シーボルトの船の影が消えても、波止場に立ちつくしていた。（つづく）



オランダ船入港の図

これは、オランダ船の入港を待つ様子である。

カピタン（館長）の部屋の物見台から、蘭船の入港を望遠鏡で見ている。

そばの女姓は丸山遊女でカピタンの愛人であろう。子どもも彼の子どもであろう。

遠くにオランダ船が見えている。

倉敷美観地区新春ウォーキング

事業委員会 工藤 博



倉敷駅集合

極寒と強風の続いてきた今年の 2 月中旬、突如、寒さは和らぎ風もない絶好の晴天に恵まれた 2 月 18 日（日）歴研恒例の新春ウォーキングを倉敷市美観地区で実施した。

ウォーキングは大橋家住宅～誓願寺～旧大原家住宅～旧中國銀行～観龍寺～阿智神社～アイビースクエア倉紡記念館を巡る普段の観光コースにない美観地区と呼ばれる以前の阿智の里の由緒ある地を訪ねる、約 3 キロ、半日のコースである。

当日は事務局の当初予想 20 人を大きく上回る 46 人の参加、3 組に別れて倉敷美観地区観光ボランティアガイドの山根巖さん（歴研会員）、難波靖弘さん、大塚文子さん、そして佐藤光範顧問の 4 人に案内をして頂いた。

まずは大橋家住宅。約 200 年前、1796 年（寛政 8 年）に建てられた。先祖は豊臣氏に仕えた武士とのこと。故有って倉敷へ。専門の職員から江戸時代の住宅のたたずまいを伺う。格式の高い和空間に感動、往時の倉敷を見る。

次いで、京都知恩院直系の誓願寺。通常は門が閉ざされているが、山根さんのお世話でこの日、歴研のために特別に開けて下さり境内に入る。屋根瓦には菊の御紋を賜っている。1177 年（平安時代末期）、配流途中に一夜の宿をとったという藤原成親を偲ぶ。

旧大原家、旧中國銀行では文化財の威容を外から見て、観光客で賑わう倉敷川沿いに出る。柳が剪定されていて川沿いの白壁の建物が遠くまでよく見渡せる。外人観光客も盛んにカメラを向けている。旧大原家は今年 4 月から、また旧中國銀行は来年から

内部も見せてもらえるという。

観龍寺から阿智神社へ。200 段近い石段を登る。道々、江戸時代から近現代までにかけて倉敷の発展に尽力されてきた多くの名家の代々の墓石が並んでいる。境内から眼下に倉敷の美しい街並みが眺望できる。

寺社から下り、東町通りを歩く。表通りを歩くだけではなかなか見られない、気付かない、400 数メートルの細い通りの両側に江戸時代から続く 100 棟近くのこじんまりとした家々が並んでいて、タイムスリップした感を覚える。ここでは平成の今日も生活が営まれている。

最後に倉紡記念館。今のアイビースクエアからの姿からは想像もできない、幕末に焼き打ちにあった倉敷代官所、倉敷紡績、そして現在の赤レンガ建てホテルへの移り変りの歴史を学ぶ。

知っているようで知らない、倉敷の奥深さを体験した今年の新春ウォーキングとなった。



阿智神社鶴亀石



古禄・某家の墓石

備前市立 備前焼ミュージアム

学芸員 中尾 貴子

JR 赤穂線^{いんべ}の伊部駅のホームに降り立つと、南側に国指定史跡の伊部南大窯跡が見えます。その反対側、北側には背の高い建物が見えます。土のような風合いの 4 階建てのビル、これが備前市立備前焼ミュージアムです。当館は 2 年前にリニューアルオープンしたまだ新しい美術館です。が、建物は 40 年以上前から伊部の町並みの一部です。

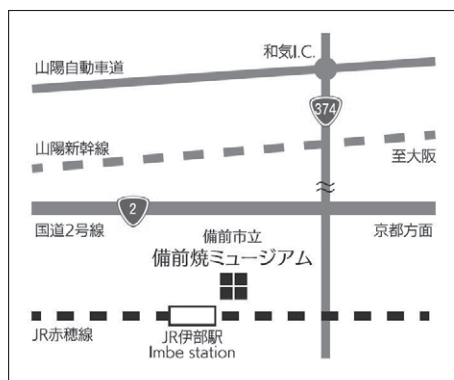
昭和 52（1977）年、備前市伊部に「岡山県備前陶芸会館」として建設されました。協同組合岡山県備前焼陶友会が中心となって、備前焼の展示販売および普及を行っていました。昭和 62（1987）年、「備前焼伝統産業会館」が完成、それにあわせて「岡山県備前陶芸美術館」へ改称、美術館になりました。そして、平成 27（2015）年、一般財団法人岡山県備前陶芸美術館は備前市が美術館事業を引き継ぎ、備前市立備前焼ミュージアムになりました。名称は変わりましたが、建物と美術館であることは代々受け継がれています。

現在、備前焼の常設展のほか、企画展も行っています。昨年度は香炉や香合などを紹介するテーマ展「小さな物に秘められた宇宙」を開催しました。今年度は、特別展「備前再発見」で備前焼の流通と影響を各地の出土品や焼き締め陶からご覧いただきました。備前焼以外の陶芸の展示にも取り組んでいます。

備前焼の展示では、壺や甕、播鉢などの日用雑器や茶陶、アート志向のオブジェなど幅広く紹介しています。なかでも、当館 2 階フロアにある浦上善次作の《金重陶陽先生像》は、是非ご覧いただきたい作品です。昭和 31（1956）年に備前焼の重要無形文化財、人間国宝に認定された金重陶陽（1896-1967）の陶像です。一見ブロンズ像のようですが、実は備前焼で出来ています。作者の浦上善次（1914-2006）は陶像を得意とする備前焼作家で、《長崎平和祈念像》で知られる彫刻家・北村西望^{せいぼう}（1884-1987）のもとで塑像を学びました。浦上は、陶陽の没後に肖像写真やご親族の協力のもとに制作。生前の氏をご存じの方によると「この像は陶陽先生によく似るとる」そうです。

素朴な土味で造形もおおらかという印象ですが、実際は、再現性の高い陶像や緻密な細工物も作られています。また、茶色一色というイメージもありますが、「緋襷^{ひだすき}」や「ぼたもち」といった窯変による赤やオレンジ、焼成時に塩を用いた青備前、白い土を使った白備前など、色々とあります。「彩色備前」にいたっては、岩絵の具や水干絵具等で着彩している、その名のとおり彩りのある備前焼です。

備前焼は 5 名もの人間国宝を輩出し、長きにわたって無釉・焼き締めというスタイルを貫いています。知っているようで知らない備前焼を文化財、伝統工芸品、アート作品など様々な視点から紹介することが当館の主たる使命です。



昨年、4 月に備前焼は、越前焼（福井県）、瀬戸焼（愛知県）、常滑焼（愛知県）、信楽焼（滋賀県）、丹波焼（兵庫県）とともに「きっと恋する六古窯—日本生まれ日本育ちのやきものの産地」として日本遺産に認定されました。この六古窯のうち、無釉を徹し一度も窯の火を絶やさなかったのは備前焼だけです。今日まで続く背景には、現代にも通じる「生きる知恵」が存在します。作品資料の美しさ・面白さだけでなく、人の生きる術も展示によって伝えられたらと考えています。

更に皆様に親しまれ備前焼の発展に資するよう館員一同、取り組んでまいります。ぜひ当館で 1,000 年の積み重ねを持つ備前焼と向き合ってみてください。



イベント・催事の企画、運営

(株) 吉備の風

代表取締役 大 田 弘 之

〒701-1212 岡山市北区尾上1561-1

☎086-941-7041 (fax 兼用)

ご近所で、ごらく



日帰り天然温泉 大衆演劇
サウナ・エステ カラオケスタジオ
ご宴会(祝事・法事) ダンスホール
ご宿泊 ご会食・ランチ

瀬戸大橋温泉やま幸

☎086-462-1126 倉敷市下庄140-1 やま幸 | 検索



やま幸LINE公式アカウント
友達追加して、お得な情報を
Getしよう！



薪ストーブ販売 設置 メンテナンス

ハースクラシック芳野

代表 濱手 英之



708-0332 岡山県苫田郡鏡野町吉原35
K-tai 090-1010-4563
Fax 0868-54-5155
E-mail info@hasukura.com
www.hasukura.com

ネスターマーティン、ソープストーン、
パーモントキャスティングス、ヨツール
ヘルゴン、モルソー、スキャン他取扱い

俳句を通じて豊かな心と

楽しい時間を共有しましょう!!

俳誌『吉備野』主宰 赤木ふみを

(岡山県俳人協会会長)

お問い合わせ先：岡山市北区東花尻405-3

TEL・FAX 086-293-1789 (赤木)

：岡山市南区浦安西町25-4

携帯 080-8241-6898 (中山)

水の技術士事務所

有限会社 アクアテクノス

代表取締役 楠 敏 明

技術士 (上下水道部門)
(衛生工学部門)

事務所 〒701-0101 岡山県倉敷市日畑825
TEL 086-462-2909 FAX 086-462-3026
E-mail: aquatechnos@trad.ocn.ne.jp
URL http://aquatechnos.net/
携帯 090-7894-5519

汚泥減量化剤の製造、販売
特許商品「スーパースラッジ」

安心と安全をお届けする

有限会社 防災システム

日本火災学会正会員・社岡山県消防設備協会理事
建設業登録業者

代表取締役 山 崎 泰 二

YASUJI YAMASAKI

〒702-8002 岡山市中区桑野504-1

TEL (086) 276-2220(代)

FAX (086) 276-2241

E-Mail: top@bosaisystem.co.jp

http://www.bosaisystem.co.jp/

岡山歴研サロン5月例会案内 「どこで生まれた桃太郎さん」

桃太郎について私は研究者ではありませんので、皆様には物足りないかもしれませんが、「なんで岡山がももたろうなの？」ということなどを知っていただければ幸いです。

講 師：古川 克行氏

(前岡山シティミュージアム映像ディレクター)

日 時：5月10日(木) 13時30分～

場 所：ゆうあいセンター 2階

申込先：FAX 086-806-2525 (山田)

TEL 090-7130-2636 (長安)

お く や み

- ▶当研究会、元副会長本松一郎氏が去る平成29年11月18日亡くなりました。当会の設立時ご尽力をいただきました。衷心よりおくやみ申し上げます。
- ▶美作の中世山城連絡協議会の山形省吾さんが平成29年12月21日亡くなりました。岩屋城の探訪会では大変お世話になりました。謹んで哀悼の意を表します。

寒明ける可動敷居は年貢跡
墓揃う古祿の威風雨水かな
水仙や磴の山門刃跡
阿智の宮膨らむ梅の磴に映ゆ
亀石の背に生る大樹うらけし
町衆の春の宵なり芭蕉堂
代官跡日本遺産の春の土
文化の香蔵街を透く雪解水

「冬うらら」 「光の春」の絶好の日和。ゆっくりとした口調のガイドに連れられ、古祿・新祿と言われた町衆たちが活躍した阿智の里を歩いた。倉敷に棲みながら、初めてのことに、驚くことが多い。それを拙い句にした。

倉敷ウォーキング、余談

楠 敏明(会員)

編集後記

この3月より「岡山の底力」と題する講演会シリーズが始まります。第1回目の講師は臼井洋輔先生です。「おかやまの文化財」の著者が岡山の文化の特徴を5つ挙げて、「スピリットオブオカヤマ」と題して講演をして頂きます。興味津々です。是非、ご参加下さい。

丸谷憲二さんの「邪馬台国は岡山にあった」の後篇を載せました。彼は「邪馬台国」の条件として地名、「太白」と「黥面(入墨面)」を挙げています。今回は黥面に関する記述です。ただ、地名、「太白」と「黥面(入墨面)」だけで邪馬台国は岡山だと断定できるのか、との異論、反論の方も少なからずおられると思います。是非、投稿いただき、紙面上で論を戦わせていただきたい。

能勢初枝さんから届いた「シーボルトに関わる三人の美女の生涯、母タキ・娘イネ・孫タカコ」

を今回から連載で載せます。今回は、母・タキとシーボルトにまつわる話です。

備前市立備前焼ミュージアムを学芸員の中尾貴子さんに紹介してもらいました。昨年、備前焼は「きっと恋する六古窯」の1つとして日本遺産に登録されました。

今回、21号より広告を掲載することにしました。御協力の程お願いします。(楠)

発 行 岡山歴史研究会
会 長 大田弘之
編集長 楠 敏明
事務局 〒702-8002 岡山市中区桑野504-1
山崎泰二方
自宅電話(兼用) 086-276-6654
FAX(専用) 086-276-2241
ホームページ <http://b.okareki.net/>